

3

南区
石山南小学校の場合

開放図書館が 子どものオアシス

週3回午後1時～4時に、学校の図書館を開放し、児童と地域の交流の場として活用するのが「学校開放図書館」です。その運営を担うのは保護者や地域の方からなるボランティア。石山南小の開放図書館「ぷらたなす」では、40人以上のボランティアが、図書の整理や絵本の読み聞かせなどを行い、児童との交流を深めています。



インタビュー

地域の方



池田 志津江さん

開放図書館ボランティアの要である開放司書。2人の娘が同小に通う。



佐藤 広也さん

石山南小5年1組の担任。司書教諭として教育への本の活用に取り組む。



6年2組 山村 華穂さん

開放図書館には優しいボランティアさんがいるので、すごく入りやすいです。読み聞かせのおかげで面白い本もたくさん知りました。



開放図書館のある日常が、 児童を守り育てる。

開放図書館のボランティアについて教えてください。

池田さん(以下、池田)

図書の貸し出しや蔵書の整理、絵本の読み聞かせのほか、紙芝居などのイベントをやることもあります。

佐藤先生(以下、佐藤)

ボランティアさんによる読み聞かせは、国語や社会の授業の一部として、定期的に行っています。開放図書館が始まった十三年前から続いているよね。

池田 そうですね。ボラン

ティアの年代も幅広く、若いお母さんや一般の地域の方のほか、開館当初からずっと続

けている方もいます。
開放図書館は、児童にとってどんな存在なのでしょう。

佐藤 ほつとでできる居場所

になっていないと思います。親や教師に言えない悩みなんかも、ボランティアさんになら言えることもあると思う。

池田 わたしたちも、児童

が真剣に本を読む姿に癒やされています。また、ある年配のボランティアは、自らの体験談を交えながら戦争の絵本を読んだことがあります。

そういった、児童と心を通わす貴重な場にもなっています。

佐藤 開放図書館があるおかげで、日常的に児童は地域

とつながり、地域に見守られながら六年間を過ごす。この意味はすごく大きいと思いますね。

開放図書館が児童や地域に根付いているんですね。

佐藤 そう思います。うちの

児童は、六年間で百五十冊以上の本をボランティアさんに読んでもらっています。そして卒業前に、それらのうちの一冊を、最後の読み聞かせとして読んでもらうんです。

そうした開放図書館とボランティアさんの思い出は、この学校にいた証として児童の心に残り続けていくと思います。

池田 先生や児童と一緒にイベントを楽しんだり、ボランティア仲間ができたり、わたしたちにとってもかけがえない場です。